
るが全ておかしいってなくらいにくらいにゲシュタルト崩壊が目的の小説の題名はつまりめっちゃ

朝昼夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くろいかつちゆうそのたもろが全ておかしいってなくらいに
くらしいにゲシユタルト崩壊が目的の小説の題名はつまりめちやくち
やが好まれる 目標ねこれ

【Nコード】

N46260

【作者名】

朝昼夜

【あらすじ】

黒甲冑がどうこうとかそういつ話を予想中

赤と緑

槍が、一本とかそんなもんでなく百本近いのではないだろうか、とにかく入り乱れては投げられている。争いだ。人々が争っているのだ。己の正義をかけて槍を投げている者もいれば、ただ人を殺したいという快楽に浸るがために槍を投げている奴だっている中で、砂埃が舞う。

荒野。生命の主張が皆無に等しいほどに滅亡に溢れているその荒野で人々は駆け抜けているが、それぞれが己の身を守るための黒甲冑を身に纏っている。お互いが黒甲冑を身に纏っている上で、右側の集団には頭部に赤色線がいくつも入り乱れている。血管が張り巡らされているように複雑なそれは黒甲冑の物々しさと相まって、恐ろしさを持っている。

対する左側の軍は右腕の部分に緑色線がいくつも入り乱れていて、やはりそれも血管が張り巡らされているように複雑だ。黒甲冑が物々しい中で、緑色の線は樹木の安らぎを連想させるから恐ろしさを中和させている。

その二軍が、砂埃に塗れながら、大声を出し合い、争っているのだ。

途中、二軍の大声を全て掻き消すようなノイズ含みの音が、荒野全てに鳴り響いた。

『貴様らのHAMBURGERの毒性を許す甲冑者は我らが集団に誰一人として存在していない！ 貴様らのドーピング行為が子どもたちに悪影響を与えていることは間違いなしだ！ 貴様らは全員、八つ裂きしてくれるぞあ！』

右側の頭部に赤線が入っている集団の一番背後の方から流れてきた声である。拡声器でも使っているのだろう、流れる男の声は（しみと汚れがある感じの声）ザー、ザー、と時折乱れるが同じような内容の言葉が何度も繰り返されるので、乱れようが相手側には否応

無しに響いていく。

それに対して、左側の、右腕に緑色の線が入っている集団は特に反応を示さない。ただ黙々と、砂埃を上げながら彼らは荒野を直進している。槍を投げながら。

生々しい音をたてて槍が甲冑を突き抜けること多数。重力に引つ張られたことよつて力が増したということだろう。それらの槍が人の心臓を貫くこともあれば脳を貫くこともあり、膀胱に突き刺さることだつてある。とにかく甲冑者たちは槍に貫かれれば、ただでは済まない。

生死をかけて彼らは荒野を駆け抜けていた。赤の右側は拡声器で主張を訴えながら。緑の左側は黙々と突き進みながら。槍で激突みんな死ぬ。

そして。

やがてどれ程の時間が過ぎただろうか。右側も左側も、互いの陣営、残るは一人となつた。

黒い甲冑がそこら中に倒れこんであり、地面が真っ黒に染められている様は、まるで地面がガラスの羽で満たされたようでもある。赤の血管は地割れのように、緑の血管は蔦のように、見えた。

そんな中、それぞれ一人ずつ右側と左側、黒甲冑が向かい合ったまま動かぬ。

赤側の男は右手に槍を持ち、左手に拡声器を持っている。

緑側の男は左手に槍を持ち、右手にHAMBURGERを持っている。

緑側の男が右手を持ち上げ、HAMBURGERにかぶりついた。「むしゃ、むしゃ」

荒野の静寂なる空気の中で、緑側の男の咀嚼の音が響き渡る。

赤側の男は拡声器を持ち上げた。

「えー。あなた。やめなさい。HAMBURGERをそんなにむしゃむしゃと音をたてて食べるのはやめなさい。ここは戦場です。戦場で飯を食つのは、やめなさい。ドーピング活動をするのは、やめ

なさい。わかつておりますか？」

しかし緑側の男はそれでもHAMUBURGERを咀嚼した。

「むしゃ、ぐわっしゃあ、むしゃ」

さらにやかましい音をたてるようにもなった。だから赤側の男はむかついた。

『いい加減にせんかい……』

彼は雷オヤジなどを遙かに超える威圧を持った怒声をはなちながら太陽を背にして、空へと舞い上がった。そして、一旦、空中で停止したかと思えば、槍を地面に向けて突き出す構えと取った後に、緑側の男の黒甲冑に向けて急降下してみせたのである。

『貴様はもうくたばりやがれこの糞野郎！』

と拡声器を使って必死に叫びながら。緑色の血管めがけて。

だが。

スツ……

こんな効果音が聞こえたか否かの事実はわからない。だが、緑側の男の動きが恐ろしい程に敏捷だったことには違いは無い。それがドーピングによる効果なのだとしたら、ドーピング行為によって得られる力の凄まじさというものが見るものに伝わるというものだ。勿論、槍を突き出した者にも。だから、突き出した者は……。

突き出した者は、避けた者に背中を向けてしまったということになる。一瞬の静寂と緊張。その間にも荒野に乾燥した風は吹いていたが、次の瞬間には、避けた者が槍を突き出す。

緑色の血管が点滅し、輝き、まるで力を込めているかのよう。実際に、込めているのだらう、槍が瞬時に持ち上げられ、赤側の男が避ける間も無い、血管が走る頭部へと槍が躊躇なく振り下ろされたのである。

黒甲冑から血液が流れることはない。甲冑が槍に突き破られる音と、何か人間の骨が砕ける音が鳴り響くだけのことだ。渴いている乾燥の地で、ひそやかに。

こうして赤側の陣営最後の一人が地に倒れた。

最後に残っていたのは緑側の陣営の男である。そいつは倒れた赤側男を見下しながら、上手そつにHAMBURGERに齧り付くと、誰にも聞こえないような声量で、呟いた。

「ああ、疲れた……」

赤と緑（後書き）

続けるかはわかりませんが…。

空の太陽に雲が差し掛かり、日が薄くなって地表が少し暗くなる。ただでさえ黒甲冑が地に伏していて黒くなっている荒野だと言うのに。

そんな荒野に、岩場がいくつもある。そこら中で大小問わずごつと点在している。そんな中でも、人工的に作られたのだろうか、岩が、立方体の形となって直立している空間があった。いくつもの岩が積み上げられるなどしてその立方体は完成しているのだと思われる。なんだか簡素な外観だが、それが良いとも言える。そしてこの壁面には、等間隔に、穴が開いていた。

いや、穴ではないのだろうか。窓、とも言えるとも思われる。ガラスは張り込まれていないが。だが確かに窓なのだろう、中に人がいるということなのだろう、その窓に少し近づけば立方体の内部に光が灯っていることがわかる。燈色のランプのような、仄かな、しかし暖かみのある灯りだ。

そしてそこにも、黒甲冑を身に纏った者たちがいたのだ。外で争っていた連中と、その屋内にいる連中の違うところは、あまりない。唯一違うのは、やはり部分に配色される色で、屋内にいる黒甲冑は、全員が胸の部分に青の血管を張り巡らせていたのだ。その青はまるで深海のようにコクのある色と言える。

そういう連中が立方体の内部で五、六人程はいた。頭部の黒甲冑は脱いでいて、銀髪が露わになっている者や、青髪の輩などもいた。黒髪のものもいるが。その三色だ。銀と青と黒。一番割合が多いのは黒髪の者。

そういう連中が何をしているかというと、デスクワークをしているように見える。パソコンなど稼動音を鳴らし、そのディスプレイの目前で黒甲冑がキーボードを叩いたりしている。用紙にペンで何か書き込んでいる者もいたし、窓から先ほどまで争いが起きていた

方角に目を向けている者もいた。

「ようやく終わった。今回、長かったよね」

争いの方角を眺めていた黒甲冑が無邪気な風に喋る。黒髪で肩に当たるか当たらないかの長さはショートと言える。丸い目をしていて、全体的に見て可愛らしく見える彼女は若者だろう。

隣で事務を行っている風の男性に、彼女は話しかけている。その男性も若者で、彼は銀髪だ。黙々と作業をしている彼は彼女の言葉など耳に入っていないのだろうか何の反応も示さない。それをまったく意にしないのか、ほとんど間を入れず、黒髪の彼女は言葉を続けた。

「今回はくじ運がよかったっていうか、ほんと、こういう役割ばかり回されるんだったら本当楽だと思うんだけどねえ。でもさあ、急所点数を取れた時の快感はやっぱりたまらないってのもあるから、こういう事務な役割が退屈だって言う風にも言えるよね。ま、来月に期待ってことかな。次、青があっち側に回ったら私、絶対最後まで残ってやろうと思うんだ。で、相手側の最後に残ってる奴にこういうの。『お前の命は何色だ?』って。ハハハ。この間さあ、テレビでこの台詞聞いてかつこいいつつって痺れて忘れらんなくて! あー。そう考えたら槍の練習したくなってきたなあ。わくわくしてきたなあ。ちよつとね、ふふ」

そう言った彼女は槍を突き出すような仕草を思い切り良くやってみせた。その光景を銀髪の男はチラツという風に横目で見ると、

「レミレは」

と小さく小さく、相手に伝える気がそもそも無いような声を出した。だがレミレは地獄耳なのか、

「なに? なんか、いった?」

と銀髪の男に顔を近づけた。男は近づかれた分の半分程顔を遠ざけてから、

「なんにも」

とだけ、今度は伝える気のある風な声量。そして彼はデスクワー

クに戻った。顔を俯かせて。

レミレは「ふうん」と首をかしげるような仕草をしたかと思うと、
どろろという感情の流れがあったというのだろうか、次の瞬間には拳を
突き出してた。無論、銀髪の男に向けて、だ。

「はは!」「うわぎゃあ!」

そんなやり取りを煩わしく思ったのだろう、パソコンに何やら打
ち込んでいた青髪ロングのもっとも年長者と思われる女性が、笑顔
で怒った。

「あなたたちみたいな元気有り余る若者が戦場に出ても頭上の槍に
気が付かないからすぐやられてしまうでしょうね。かといってあ
んならには事務も向かないわ。もう、帰っていいんじゃない?」

レミレレ(後書き)

失敗の予感が。

結果

立方体なる岩造りの室内から二人はものの見事に叩き出されて、すっかり二人は元気が失われてしまっていた。特にレミレなんかは黒眼に赤裸々と涙を湛えていたりして、すっかり貧弱気味だ。

「あーあ！」

などと首を持ち上げつつぼやくレミレは空に文句を言っているようでもあったが、空にはカラスさえも飛んでいないわけである。だから彼女は太陽に文句を言っているようでもあったが、そんなことは彼女の隣で俯いているトロ口にとってはどうでもよかった。

そう、この俯き気味の若者は、トロ口、という名前の甲冑者なのだ。レミレの快活さとは対照的な印象を他に与える彼はだらんと長い直毛の銀髪を垂らしていて、そして色白い。オセロかよってくらいに甲冑の黒との対比が凄まじい。よたよた、あるいは、トロ口、彼は荒野でふらつく。

普通こんな人間を見かけたら人はその人間を心配するが、いつも一緒にいるレミレは彼がいくらふらつこうが特に心配をする様子も見せない。トロ口はいつもふらついているのだ。

「レミレは」

先ほどのように、相手に伝える気が無いと思われても仕方が無い小声のトロ口は、レミレに殴られた右頬を白くて細長い指で撫でた。彼の右頬は真っ赤に腫れ上がっていた。

レミレは容赦無いのだ。

「なに！ またなんか言ったね！ よく聞こえない！ トロ口の言葉が何一つ私の耳に届いてこないよ！ もっと声をはつきりテキパキといったら面白いんじゃないかなあ！ まあ、トロ口には無理か！」
レミレは本当に容赦が無い。これではただの八つ当たりじゃないだろうか。

だがトロ口は細長い面を不機嫌そうにしかめるだけで、そしてレミ

レに言葉を返したりはしないのだった。だが、
「…ッ」

と本当に小さな舌打ちだけは打ったりもしているのだった。言葉では負けるから舌打ちだ、という意図でもあるのだろうか。だが本当に小さな舌打ちで、しかも何か弱々しい。

だが弱々しいにしても、舌打ちである。レミレの性格に舌打ちが耳に入ればもう一発くらい拳がト口に振り下ろされてもなんらおかしくない。だが、レミレの耳に舌打ちは届かなかつたのだろう、彼女は特にト口に睨みなどを返すでもなく、拳も返さない。なぜならば、彼女は別のことに興味が向いていたのである。ト口いびりから別のことへと。ではその彼女がなにをしているのかと言えば、周囲を忙しなく眺め回していた。人が登れるほどの岩に乗って、その上から乾燥の荒野を見回している。大きめな黒目をキョロキョロと小動物のように動かし。そして、

「そろそろみんな起き上がってきて面白い光景だよ、ト口。殺された人全員の痛みが治って、元気はつらつ。あの起き上がる瞬間ってとても気持ち良いらしいよ。今度こそ、あれに参加しようね」

彼女は先ほどまで争いが起こっていた方角を、にっこりと満面の微笑みを湛えながら指さした。その笑顔には一切の陰りが無く、無邪気さばかりが表立っている。口ぶりも彼女にしては穏やか過ぎる程で、人によつては逆に不気味さを感じるくらいかもしれない。ト口は言葉を返しはしなかつたが、ただ小さくこくりと頷き、彼もまたむっくりと糸に吊り上げられるように起き上がり始めた黒甲冑たちの姿を、遠目にぼんやりと眺めるのだった。

「気持ち悪くも…見える…」

感想を呟きつつ。ト口は少し顔をしかめた。

やがて倒れていた黒甲冑は、赤緑問わず全員起き上がってみせる。と次には何をするかと思えば整列をしてみせた。広大な荒野に一列になって並んでみせる黒甲冑たち。赤の軍の一列。緑の軍の一列。その二つの列が向かい合い、握手をしていた。さも楽しかったです

ねと談話し合うスポーツマンのように彼らは友好的な握手をしていた。肩を叩き合ったり。先ほどまで槍を投げ合って殺し合いをしていた連中の行いには到底見えない。が、彼らは実に友好的。最後に一礼をし合うと、拡声器を持っていたあの頭を貫かれていた黒甲冑が、

『点数の発表!』

と叫びあげた。それは立方体の岩造り建築物に向けて発されている叫び声であった。他の黒甲冑者たちも叫びと共に身体を建築物の方へと向け、そして荒野、沈黙に包まれた。

その静寂がどれほどか続いてレミレが「退屈」とか言って岩で飛び跳ねて転がり落ちた頃、岩造り建築物の屋根部分に取り付けられている錆びている拡声器からとんでもない爆音が垂れ流された。垂れ流されたというか、もう、溢れ飛び出たという感じに近いかもしれない。

そして点数が発表された。

『えー。ただいまの結果……』

透き通っていて抑制と大胆さの両方がかね揃えられているまさに完璧と言ってもよろしい女性の声は先ほどト口とレミレを怒鳴った甲冑者の声であった。

その美麗なるボイスから伝えられた結果に、荒野にお行儀良く並んでいた黒甲冑者たちは、だいぶのどよめきをまるで隠すことが出来なかった。というのも、全員が緑の勝利を想像していたからだ。

勿論、赤の側の連中も、である。

『赤の勝利です。急所点数での撃破が赤は緑の二倍ほどでした。では、点数の発表はこれにて終了です』

プツリ、と拡声器の電源が切れる音が荒野にサインと伝わる。そしてそのサインが荒野中に染み渡ったと同時に、赤側の連中全員が、騒ぎ出した。勝利の喜びである。

対する緑側は勝利を予想していたこともあったがために落胆がズドンと甲冑にのしかかった様子で、全員が重苦しそうな仕草で頭

部の甲冑を外し始めていた。そして全員が、慰めあうようにして肩を叩き合ったり優しそうに小声で何か呟きあっていたりするのだった。HAMBURGERを何処かから取り出してむしゃむしゃ自棄食いみたいに頬張る者もいて、その自棄食いを注意するしっかり者の姿もあつた。

遠目からその様子を眺めていたレミレは、

「緑の勝ちだと思っただけどなあ」と岩を背もたれにしながらぼやいていて、ト口は、

「赤だと思つてた」

とこれもやはり小人が呟くように。しかし得意気な雰囲気が顔から滲み出ている小癩だった。

レミレが見たらぶん殴るような、得意顔。

帰宅

一般人というのは黒甲冑を身に纏っていないだけに景色に溶け込みやすいのだろうか、何処に潜んでいたのかと思うほどに荒野の四方八方から姿を現した。彼らが軍隊だったならば黒甲冑たちは逃げ場も無しに囲まれて虐殺されるだろうという想像が出来るほどに、ワラワラ。彼らはみな手に色紙を持っているか花束を持っているか。そのどちらか。彼らは黒甲冑たちに接近して我よ我よと己の存在を主張しようとしているが、どれもこれも同じにしか見えない人々の集まりではあった。そんな人々に甲冑者たちは愛想良くするものが多かったが、中には露骨なる無愛想を試みている者もいたりした。だがそんな風は無愛想な甲冑者にも花束は渡されるし、色紙にサインを要求されたりもしている。そうなるは無愛想なものも表情は変えないが、仏頂面にサインペンを手に取り仏頂面に色紙にサイン。人気のある甲冑者たち。

「うおおおっ！ キター！」

これは誰かの感激の咆哮である。

「キヤー！ イヤツフウー！」

これも誰かの感激の咆哮である。

「ウホー！ いやっふっうううう！」

これも誰かの感激の咆哮である。

甲冑者というのはこのように一般人とは別の類の存在とされていて、憧れの対象となる。だから上空などでヘリコプターは飛んでいたわけだが、その内部で記者がビデオカメラを利用することで甲冑者たちの殺し合いは見事、全国放送されるという流れとなっている。結果として『一人も死ぬことのない殺し合い』という、なんとも文学っぽい感じではあるが、なんてことはなく人々はこれをエンターテイメントとして受け入れている。だから人々はこのようにして熱狂的にサポーターとなつてサインを求めたり花束を渡したりして

いるわけである。

「お疲れ様ー！」「愛してるッ！」「すごかったですー！」「次は期待してるよ！」「お疲れー！」「サインください！」「花言葉は優美ですっ」「美しかったよー！」「かつこよかった！」「赤の糞！」「緑の糟！」「んだとおらあ」「お疲れさまー！」「ヨカツタヨオー！」「泣いた！」「感動した！」「お前、まてこら、糟！」「おいやめる！」「おい、誰か止める！」「赤の糞！」「花言葉は勇氣ですう」「すごかったよー！」「緑の糟！」「ああっ！」「やめるおいコラ」「愛してるッ！」

緑側のファンはやはり右腕にペイントをしていて、赤側のファンは顔面にペイントをしていたり赤髪

にしていたりなどの行為。顔が真っ赤な人が花束を抱えて「花言葉は愛です」などと述べる様は先ほどまで槍で殺し合いをしていた甲冑者にも衝撃を与えたりする。インパクト強烈。

一般人と甲冑者がじゃれ合うこと一時間程度。

緑側の甲冑者たちはいい加減に疲れてしまったのだろうか、「ワルイネ」などと言ってサポーターの前から姿を消していく者が多かった。中にはサポーターにHAMBURGERをせがむ者もいたりしたし、或いは、サポーターの目の前でHAMBURGERをむしやむしやと咀嚼し「上手いぜ、これ」などと述べる者があつたりした。

それらの行為に対して緑側のサポーターは喜んでいた。

赤側の甲冑者たちはいい加減に疲れるということを知らないのだろうか、「まだまだ」などと言っては手品をするものがいいたり拡声器を使って大声を張り上げたりしてみたりなど、或いは、口から突然火を吹いたりしてみせて「パふおーまんすですう」などと述べる者がいたりなどした。口の中は火傷だらけで見ても無残なのに、そいつは笑顔。爽やかスポーツマンな白い歯で。

それらの行為に対して赤側のサポーターは喜んでいた。きっとエンドルフィンが放出されているだろう。

まったく楽しくないのは遠目でその様子を眺めるだけの二人であつた。

荒野の隅っこの少し高くなっている箇所で、二人は岩にもたれかかったまま一時間、鬱々と甲冑者たちとサポーターたちのじゃれ合いを眺めるに終始していた。レミレに至ってはストレスがもうどうしようもないのだろうか、舌打ちが止まらないらしい。

「ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ」

それを聞かされるトロはたまつたものじゃないが、トロも聞こえない程度の大きさで舌打ちを打つのを繰り返していた。

「ッ、ッ、ッ、ッ、ッ、ッ、ッ」

石造りの建築物から出て来た青髪の甲冑者は、岩を背もたれにして足を伸ばし舌打ちを繰り返している新人研修の二人を見てため息をついた。長い青髪が陽光に反射しているのは艶が良いからだろう。端正な顔立ちの彼女は歩き方もどこか颯爽としている。颯爽とてくてく歩いて岩のふもとにいる二人に、「あなたたち」、と静かに声を掛ける。その声は澄んでいる。

「ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ。ちっ」

「ッ、ッ、ッ、ッ、ッ、ッ、ッ」

まったく二人は意に止めず舌打ちを続ける。青髪の甲冑者はムカついた。

「あなたたち！」

声は張り上げられた。トロが「うわわ」と言って舌打ちを打つのをやめた。そして、

「な、なんです…」と呟いた。その隣ではレミレが舌打ちをやめないますまだ。

青髪の甲冑者はレミレにむかっていたが、しかし面倒だったのでトロに注意を促すことにする。

「一応黒甲冑を身に纏っているあなたたちのことを一般人が見たらどう思うか、想像することも出来ない？ こんな岩を背もたれにして舌打ちを打ち続ける甲冑者なんて墮落の緑連中にもいないと思

ますがね。あんたたちはさっさと立ち上がって家に帰ったらいいの。なんでこんなところで座り込んでたの」

それに対してトロは苦虫を噛み潰したみたいな顔をして、

「いや…」

と眉を潜めた。長い銀髪がたらんと揺れる。青髪の甲冑者は続けた。

「いや…じゃなくて。何、君は自分がなんでこの場で舌打ちをすることになったのかという理由を述べることすらも出来ない愚か者なの？ そんな人間が甲冑者になろうと思ったわけ？ 困るな、そういうのは。あ、あれか。レミレっていうこの舌打ちをやめることも出来ない女の子に付き従うことしか出来ない無能が、君？ 君、そういうタイプでしょ。そういう雰囲気、出してるもんねえ」

ここまで嫌味ったらしく言われたらさすがのトロも黙ってはいられないだろうか。トロの青白い顔面はみるみる紅潮していて怒りと羞恥が表れていた。だが、しばしの沈黙の後、トロは何もいわなかった。小さな舌打ちを一度だけしたのだった。

「ッ」

青髪の甲冑者はそれを聞き取らず、視線をレミレの方へと向けていた。

舌打ちをしている姿と、血眼の眼球。それをジッと眺めた青髪は、「あなたはちよっと頭がいかれてて手遅れなんだね」

両手でやれやれといった風なジェスチャーをした後に、二人の元から立ち去っていった。

「見事に貶された」

トロがぼやく。レミレはしばらくの後、突然舌打ちをやめると、何かにハッと気が付いた阿呆のような顔をしてつぶやいた。しかしはつきりとした言葉ではあった。目が見開いている。

「もう面倒くさくなったね。甲冑者もやめよう。ていつか全部やめよう。ほら、帰ろう」

と途端に立ち上がり、トロに向かって手を差し伸べることもすらも

した。その手を取りながらトロは、意味不明だなあ、という顔を
してレミレを眺めたが、彼女は薄笑いを浮かべるだけだった。

「甲冑者ってもっと格好良い感じかと思ってたけど、あんなふう
に取り巻かれてチャホヤされて喜んでるんだから、私が求めている
とは違ったってこと。トロにはわからないでしょう」

結局、レミレはトロを無理矢理に引つ張り甲冑も脱ぎ捨てた。

「緑は喜んでもしなかったじゃない」

トロが言うがレミレは、「あれは喜んでいただけに違いない」と取り
合わない。

結局、二人は家に帰った。

眠り

もう夜中ということで都市トリフィスは静まり返っている。

だがそれは普段のことで、今日は特例だから、外がお祭り騒ぎで騒がしい。

花火が打ち上げられて人が喚きたて、怒声が上がれば下品な声も上がるし、かと思えば泣き叫ぶような感情の津波が流れることもあるというわけで、非常に生気が溢れている雰囲気が、外。

家で、チエック柄の布団に包まっている青年からすれば、邪魔としか言えない。だが夜中の外では男女問わずのやかましい喧騒が飛び回っているばかりで数が群れていることが明らか。

「…ッ」

青年がいくら布団に包まり舌打ちをしようとも、圧倒的多数による大暴れに叶う道理はないのだから、青年は布団の中で安眠を妨げられるしかないのである。

彼が安眠が妨げられる要因は、外の喧騒以外に、もう一つある。

「ぐごがああああああああああああ」

トトロかよ。頭で一瞬突っ込んだが、よくよく考えてみればトトロって何だ俺そんなの知らない、とトトロは気が付く。俺と名前似てるな、誰、トトロって。とかトトロが考えている内にまた黙。

「ぐごがああああああああああああ」

家、と言ってもその屋内はまるでブルーシートを張り巡らせただけのような家もどきといった風に近い空間であり、夏は暑さを隅々まで行き通し、冬は寒さを極限まで澄み渡らせる、まさにベスト・オブ・住み辛い空間。で、ただでさえ今の季節は夏で、暑さにうだつている内に身体が腐り果てても仕様が無い程だというのに、内外からの絶え間ない騒音が止むことなく続く。

野蛮人かよ、と疑うほどの外のお祭り騒ぎに加えて、

「ぐごがああああああああああああ」

という隣で眠る女の躰、は、色気も無いから聞く者の神経を逆撫でするに充分なほどに無遠慮で、ブルーシート小屋内部では安眠というものを達成するのがハッキリ言っただけでほとんど不可能。

ハッキリ言っただけでほとんど不可能、なんて具合なのだから相当なものだが、実際、トコの青白い神経質そうな肉体が、ハッキリ言っただけでほとんど安眠が不可能、などという空間で眠りに付くのはハッキリ言っただけでほとんど不可能に決まっていた。

つまり環境が最悪ということなのだが、それに加えて彼は、なんと、昼間に着ていたあの黒甲冑で眠りに付くというあまりにもちぐはぐなことをやっていた。何故、暑いに加えて騒音、というあり得ない環境下で黒甲冑などという物々しい服装をして眠りに付こうと試みて必死になっているのだろうか。ドMだと思えない。だが彼がドMに近い行為をするのには勿論、理由があった。

「俺は負けない」

静かなる闘志を燃やしながら汗を額に浮かべているトコ。

つまり、戦っているのだ。

何と戦っているのか。隣で寝ているレミレと戦っているのだ。

戦うという言葉は聞くに斧や銃を向け合っただけでずっこんどっかん身体同士をぶっつけ合っただけというアクティブな感じが通常のはずなのに、彼がしていることは黒甲冑を身に纏いながら暑さと格闘しているという風に見える。非常に静かなる格闘でアクティブとは程遠く、しかも相手は人ではなく気温だということだから相手が悪いに決まっている。何せ気温は世界中のどこにでも関与する影響力半端ない存在なのだから。

だが、彼は戦っているのだ。気温と。気温と戦うということを通して、結果としてレミレと戦っているのだ。気温を通してレミレと戦っているのだ。だが、

「ぐがああああああああああああ」

その張本人は躰を掻いて相手を妨害している上で、己自身は安らぎの休息タイムに入っているというのが事実なのだから、まあ、つ

まり彼は、完全に、レミレには敗北している。敗北した上でせめて気温にはある程度打ち勝ちたいともがいている上で、やはり己が背負っている黒甲冑というハンデキャップの重さのせいだろうか、暑さは猛威。

トロはもう脱水状態に近づいていて今にも病院で診察を受けねば急死する有様に見える。青白い顔の彼がその時は真っ赤だった。細長い消しゴムみたいな鼻の先端に水滴が大量に付着しているがそれは全て汗だ。寝苦しい夏で孤軍奮闘を為してきたトロであるが、肉体と精神に限界が訪れるのはもはや時間の問題だろうか。その証拠に。

「……………」

彼が時折発していた舌打ちが、ここにきて止んだ。

布団をガバツ、とめくり上げると黒甲冑の青の部分に手を当てた。つまり胸の位置にある海のような青に触れる。暑さに呼吸が乱されている身体を、落ち着かせるためであるように、深呼吸をしながら、青の部分をさする彼。目をブルーシートの天井に向けてから、レミレを少し睨み付けた。

やがて、「よし」と、言った彼は、目を閉じて胸に当てていた手を放り投げ、バタリと布団に再び身を投げ出してみせた。格闘をもう一度行う決意をしてみせたということだろう。だが、相変わらず、「ぐごがああああああああああああああああああああああ」という躰に加えて。

都市トリフィスの喧騒は止まないうままだ。トロの耳に騒音はしがみついてくる。

破廉恥な声。野蛮な声。ブルーシートに拳でも叩きつけているのだろうか、時々、ぼすん、という音が鳴ったりもする。ぐもつている内容の聞き取れないノイズが耳に入り込みトロを混乱させる。

「ぐごがああああああああああああああああああああああ
寝たい。」

トロは切実にそれを願った。ふと、涙を流したいと感じた。

それから何時間後のことだろうか。朝日が昇り上がる頃に（その頃には外の騒音はようやく静まっていた。レミレの軀はそのままだった）、彼は気絶するようにして睡魔に引きずり込まれた。

その一時間後に、隣のトトロが目を覚ました。

軀は止まって、寝ぼけ眼でぼやぼやしている彼女は隣で死んだようにして眠っている黒甲冑の男を見ると、血色の良い唇をぐにやりと曲げて得意気に微笑んだ。

「私の勝ちだね。ゆるぎない勝利。完全なる勝利。こんな黒甲冑を装着したままじゃそりや眠れるわけないって。ははは」

彼女は全裸で寝ていた。

というのは嘘であるが、しかし彼女は下着で寝ていたらしいから（しかも着古した感じのよれよれ）、そりや暑くないに決まっていた。猛暑と言えども頑張ればそりや眠れた。トロがハンディキャップを三重にも重ねていたというのに彼女は逆ベクトルのハンディキャップを持っていたのである。

だが二人の約束上、とにかく先に眠れた方が勝ちという条件であったからハンデ云々言わずとにかくレミレの勝利ではあった。だからだろうか彼女の勝利を祝福するようにブルーシートハウスに差し込まれる朝日が、彼女を眩しく包み込んでいた。暖かなる陽。

本日も暑くなる、ということを示すような燃え盛る火である。彼女は「うーん」という声が聞こえたのでトロの方を見た。すると、先ほどまで死人のようにピクリとも動かなかったトロに異変が生じていたので、レミレは元々真ん丸い瞳をさらに真ん丸に見開いた。

「ト、トロ！ ど、どどどど、ど、どどどどしたの！」
風船であった。

いや、まるでおかしな話ではあるのだが。

「う、う、うーん」

「ト、ト、ト、トロ！ 破裂する寸前！」

赤色の風船が黒甲冑を身に纏っている、というのに近い感じなの

かもしれないが風船などと呑気な比喻が出来る様相でもなかった。トロの顔面や手足は、普段はまるで幽霊のように蒼白なのに現在はまるで茹蛸だった。内出血がそこから中に生じているというか、全身が内出血を起こしているというか。

レミレの頭に不吉なる予感が走った。隣のトロはこれはこのままでは……。

「トロ！ 何、ほんとにあなたは馬鹿というかどうかどうしようもないというか黒甲冑なんて着て寝るなんて馬鹿なことするから！ 待ってて今本気で全力で疾走して医者を呼んできてなんとかしてあげるから本当死ぬのはだめだから待ってて！ トロ、待ってて！」

だがトロは意識が混濁しているのだろうか、レミレの全力の叫びに対して断末魔の呻きとでも言うような答えを残して、そして首を横にもたげた。

「ト、トロー！」

レミレの叫びが、木霊した。

トロ 内面

心臓が重いなんて感覚は久しぶりだ。何時ぶりのことだろう。息苦しい重みばかりがのしかかっている。嫌だな。苦しいって感じだ。このままではやばいって感じた。

もう、ここからは抜け出さなくては。心臓が破裂する。

だが、目の前にあるあれ。あれを壊さなくては、ここからは抜け出ることが出来ないんだろうな。

それはわかってる。昔からわかってる。あれを開かなくちゃ、俺は、だめだってわかってる。だけど難しいことは確かだ。深く根付いているのがここからでも見える。あれを抜き取るには少しばかりではなく全力を込めた力が無ければならないと思う。

なんでこんなことになってしまったのかはもう理解を深めたくない。心臓が重苦しいばかりだ。

『二人で一つということを知っていてくれているね。だから君らは共に歩まなくてはいけないのは、これ、当然のことなんだから。ほら、刻印はもうついている。契約は身を縛るが、同時に安らぎともなる。あなたの安らぎがこの契約だ。辛い時にはこの刻印を睨み付けなさい。あなたに訪れる全ての悪夢は、全て、刻印の責任してよいのだよ。…その代わりに君は二人で一つということになるんだけど。なっているんだけど。しかしこうしないと死ぬのだから、仕方が無いというもの』

わかってる。言葉の全てを俺は覚えている。常々、頭の中でこの文章を暗誦してきたから言葉を忘れることは角に頭をぶつけて脳を損傷しない限りは、あり得ない。

煩わしいな、と感じているよ。心臓が重たいよ。ん、そうか、命が危険だから心臓が重たくて破裂する寸前ってことなんだから、俺は今死にそうな状態ってことだ。で、俺はこの場所で考えごとをしている。嫌だなあ。この場所は好きじゃない。遠くに見えるもの、

これ全部俺は嫌いだ。近くに見えるものになつたらもう、もつと嫌いだ。

いらつくなあ。近くにいつでもいるつてのは。お互いに近くの位置にいるばかりに腐ってしまったているんじゃないかな、関係が。いや、向こう側はそんなに腐ってるつもりもないのか。

というか、腐っていないのか。

「仕方が無いということが受け入れられないというのかね。私たちはそういうことを全て受け入れた上で自らの欲望をかなえるということをしなないと、効率が悪くなるのだよ。だから諦めなさい。酷なことを言うようだが、諦めなければ辛いばかりだよ。諦めれば辛さも少しは楽になるものさ。人生という長い船旅を渡るには諦める上手さを身につけなければ、すぐに破裂してしまうものさ。まあ、君の場合は心が破裂するよりも早く心臓が破裂してしまうのだから。：君の心臓が重みを増した時というのは、君が無理をした時ということだ。その時は、今、私が言ったように、諦めなさい。諦めた上で、物事を考えなさい。そうすれば心は安まるのだから……」

胡散臭い爺さんだった。喋り方とか雰囲気だとかが、なんとも胡散臭く全てが嘘で構成されてるんじゃないかって、見てると錯覚を起こすくらいに胡散臭い爺だった。一見まともなことを言っているように聞こえるのに、何かがおかしいというか、まともじゃない感じがするというか。本音をちつとも明かしていない感じた。嫌いだ。だから、俺はあの爺さんのことが嫌いだった。いや、まあ、俺の場合、大抵のものに対しては嫌悪感があつたけれど。

その根源が、俺にとっては結局、レミレだ。あの水晶体のような眼、が特に、嫌いだ。何時になつてもあの瞳を見る度に頭ん中が痺れる。心臓も重くなるし。

嫌いな証拠だ。心臓が重くなるのは。

何が嫌いかと言い出せばキリが無い程で、なぜかというと一度嫌いになるとどんどんそいつの様々な部分が嫌いになるものらしいからだ。俺は嫌いになるということに長けているせいかな嫌いになると

いうことに対して考察することがあるのだが、嫌いというのはレンガ積み遊びのように積み重ねるものらしい。初めは小さかった嫌悪が日々や出来事や相手の仕草もしくは言動を重ねる度にぶくぶく膨れ上がり、こちらに向かって来て、こっちの患っている心臓を圧迫させてくる。

困ったことだ。

だから他人のことを俺はあまり考えていたくないし、無理矢理他人のを受け流すことで嫌悪を考えないようにすることもあった。だからレミレに対して嫌いの感情を膨れ上がらせることに身体の方から耐えられなくなった俺は、よく、レミレに適当に合わせたり無関心になったりすることがある。

そうするといくらか心臓が楽になるし、それに伴って気持ちもスッキリする。

そういうことをするようになったのは、最近のことだ。

あまりにも人間として性格が悪いよな、と自分でも自分のことが嫌になる。

だから俺は自分のことも嫌いなのかもしれない。

ハハハ、それはまずいよな。俺、そしたら何が好きなんだ？

最近になって胡散臭い爺さんの言葉を暗誦するのが多くなってきた。あの爺さんのことは嫌いだがあの爺さんの言葉は嫌いでもないのだろう。爺さんから紡がれるあの言葉は、あの爺さんが吐いた言葉だと考えずに切り離し、どっかの教訓だと思えば、なんだか為になるありがたいお言葉という気がするのだろうか、気持ちがある程度収まる。

『君の心臓が重みを増した時というのは、君が無理をした時ということだ。その時は、今、私が言ったように、諦めなさい。諦めた上で、物事を考えなさい。そうすれば心は安まるのだから』

この部分は少し、嫌いだったりもするのだけだ。

何故かは、知らない。

(俺がこのように嫌悪ばかりを抱くごみ屑みたいな人間になったの

は俺のせいじゃない。あいつらが…
このことはしっかりと知っている。
あいつらも、ごみ屑だ。

ブランドリア

略奪都市ブランドリアなんていう名前がそこに付けられたのには、様々な略奪がそこに存在していたからこそ生じたわけであるが、物や心など問わず様々なものが略奪されるという話であるが事実なのだろうか。

鳥のバーバルという者はその噂を虚偽だと信じていたが、都市に足を踏み入れた瞬間にその心を奪われて虚偽は略奪され、陽気な微笑みを浮かべてブランドリアを彷徨うはめに陥った。しかしブランドリアはどんなものでも略奪するのだから、その陽気な微笑みさえも略奪するのだ。そうすると鳥には翼と悲しみと怒りが残ったが、翼はちぎられ悲しみと怒りを感じる心さえも奪われた。だから鳥は略奪都市で二本の足だけでぴょんぴょんと飛び跳ねるだけの存在する理由もわからない無感情の木偶と成り果ててしまった。だが救いが訪れることはなく、鳥は遂に命さえも略奪された。腐敗物ばかりが転がるコンクリで、鳥のバーバルも腐敗物の一部となった。

全てが略奪される恐ろしさ。だが恐怖さえも略奪されるのが常。人々はもう、そこに住まう存在たちはもう、この理不尽なる都市で理不尽を感じる脳味噌さえも奪われている。彼らは毎日毎日、屍のように都市内を放浪する。放浪が奪われたものもいる。足がもげてしまったからだ。

そこまで奪われては命が奪われるのも時間の問題だ。だから略奪するか略奪されるか、その極端な構図だけがブランドリアには蔓延している。

そんな略奪都市ブランドリアを訪れたのは一人の女。

女は片割れの己を救うためにブランドリアにある一つの洞窟を指していた。

都市の中に洞窟などがあるなんて場違いな話だがブランドリアの

住人たちの中にはその洞窟を知らないものはいないし、他の都市に住んでいる者も洞窟の噂を知っている。何故、ただの暗闇の穴ばかりが都市を越えて有名になるのか。

（なんだか汚い人しかいないなあ。そりゃそうか、きつと清潔ささえも略奪されてるに違いない。みんなして活気もないし。じゃあ他に何かあるんだろ。陰気：あ、でも、陰気でもないのかなあ。全部略奪されるって、どういふことなんだろ……あ。…あそこにいる人は、まともそう。洞窟の場所知ってるかどうか、話しかけてみようか）

腐敗物とか枯葉だとかガラスだとか、はたまた何で道路にあるのか理解が出来ないような代物だとか様々なものが転がっている道路は人が横並びで二十人くらいは歩けるほど幅が広い。その道路を少し外れた端っこの方に空き地のように開けたところがあつたのだが、そこで一際目立つ人物が佇んでいた。

瓦礫の山。そこには腐臭さえもなかったが人だけだけはある。その瓦礫の山の麓にその人物は佇んでいて、他の人物と違って明らかに活気というか生氣を持っていて、顔も体もやつれていないように見えるし、服装だって華やかで奇抜だった。

そのようにその人の様子を道路の真ん中から眺めて理解出来るのだから、相当にその人物は異端だった。それは女性だった。奇抜な服装は占い師を女に想起させ、女はその華やかさに憧れを感じた。

元々が水晶体のような瞳が、うるつとさらに潤った。なぜなら女が身に纏っている服装はつぎはぎだらけで華やかさの対極にあるから。女は曇り空を見上げ、そこに灰色を濃く見たので雨が降ってくるかもしれないと感じ、何故都市トリフィスにいた時には太陽があんなにも力強かったのにここでは太陽が隠れているのだろうと不思議に思った。思ってから、ああ、それも略奪されているのか、と気が付いた。

じゃあなんで灰色の雲は略奪されないのだろう、とも思った。

だが彼女はそんなことで悩んでいる場合では無かった。医者によ

れば彼女の片割れは危険な状態であり一刻も早く希少な薬草が必要だということだから、天気のことにも目を向けて気をやるなんて暇をやっている場合ではないのだ。女は自らの心臓の鼓動を指先でしばし確認した後、大きく息を吸い、そして吐いてみせた。

そして、「よし」と言うと、彼女は瓦礫の山の方角へと足を進め始めた。彼女の水晶体のような瞳は力強い光に満ち溢れ、また歩調は一步一步を踏みしめるようで、指先を心臓に当てたままに。瓦礫の山の、麓に佇む華やかなる女の下へと。

だが歩く女はその歩行を邪魔されるといふか、真つ直ぐな瞳で真つ直ぐな歩行で真つ直ぐな姿勢で真つ直ぐに瓦礫の山に直進したかったのに、彼女の向かい側から一人の屈強なボディビルダーみたいな男性が歩いてきていてそれがまったくもって彼女にとって邪魔だった。彼女は真つ直ぐに瓦礫の山の麓へと向かうつもりだったので避けるつもりはまるで皆無だったのだが、向こうの男性も避ける気が無いようで、お互いが直進を続けていた。男はサイミみたいな顔をしていて体はゴリラのようだった。対する女は力強い小動物という感じだろうか。

その二つの直進している存在の表情の対比が面白い。女は生氣に溢れているが、男の方は屈強なる肉体の癖に顔面には、生氣が略奪されているのだろうか、目が濁り切っており何もそこに映していないかのような感じだ。まるで死んでいる人間が何か別の人物によって動かされているかのような感じだ。だが、男には糸がくっ付いているわけでもなく、自らの意志で動いているはずだった。

女も向かい側から来る男が通常の様子でないことには気が付いたが、だが、それでも真つ直ぐ突き進むことを止めようとはしない、どころか、彼女の一步一步はさらに力強い代物に変わっていたのである。まるで男の屈強なる肉体と体当たりすることも厭わないと主張しているようなその歩行は、まるで光線のように輝いているではないか。だが、光線はすぐに反射してしまうものではあるのだからどうしたものだろうか。

だが、彼女の光は屈折するということを知らないらしく、男を脇にどけてみせた。

「私の行く手を阻む荒々しい男などは鍛えた拳で一撃だっつもの」
女の右拳は男の右肩に躊躇無く入り込むと、男はその衝撃に耐え切ることが出来ずに滑稽な回転をして、結果として女に道を開けることとなった。こうして女は、力で示すことで、屈折することなく目的の人物へと歩を進め、それから先はなんらの目立った抵抗を受けないこともなく、遠目からでも美麗を周囲に伝えた占い師風女性の下へと到着したのである。

その占い師風は妖艶ささえも兼ね揃える才気溢れる容姿であることが間近になるとハッキリと女に伝わった。女はそのあまりの色気にたじろくこと数歩だったが、しかし女も、水晶体のような瞳は、前向きなままに輝きをやめることは無い。息を多少整えてから、明るく、そしてなるべく相手に好印象を与えるような配慮をして、言葉紡いだ。

「あの、突然で申し訳ないのですが、お尋ねしたいことがあります。あなたのような方なら私の尋ねたことなど簡単に答えてくれるのではないかと思って、向こうから歩いてきたのですが…」

女はしかし途中で言葉を切った。なぜなら、自分自身好きではない、少し淀みの入っている声が、やけにブランダリアの景色に響いたことに驚いたからだ。回りが静まり返っていたのだ。彼女は思わず首を右へ左へ動かしてしまい、そして瓦礫の山に座っていた無気力の人間たち全員が、自分のことを注視していることに背筋を凍らせた。さらに、

「…お尋ねされたら、答えるとも思ってた？」

占い師風の女の声がひどく冷たかったことも彼女の背筋を緊張させる理由としては充分だった。ああ、相手は悪な女性だ妖艶さを兼ねていたのは悪だったからか、ということをや女はほぼ無意識的に理解させられた。そうすると女は、その占い師風女性に対して『女狐』だというイメージを浮かべることとなったので、光を強めて前

のめりとなり相手に臆することを避けた。

「占い師の方ならこの略奪都市のどこかにあると言われていた洞窟の場所を簡単に教えてくれるのかと思ったのですが。そうですね、お金が無ければ占ってはくれるものじゃないですね。そりゃ尋ねただけでは……。それとも、占い師というのが私の勝手な勘違い？」

女は語気を強めている。女狐は、その様子を滑稽だとも感じたのだろうか、細長いクチビルを、すっ、と横に広げて美しい歯並びを女へと見せた。そして、

「まだ小さい猫のようだけどドブに塗れてるのが醜いわね。でも、そういうのも趣味の、範疇」

女は、あっ、と驚いて拳を女狐に向けて突き出していた。女狐の黒眼が血に染まるのにただ知れぬ恐怖を与えられたので、それに耐え切れず体が動いたのだった。

だが女狐の顔に突き出された拳は、女狐の尖っている鼻先を押し潰すことは無く、鼻先もその奥にある骨さえも突き抜けて瓦礫を殴った。女に瓦礫からのリアクションが送られ、彼女の拳は熱を帯びた痛みを負った。「いたいっ」女はなさけない叫び声を上げて、痛めた拳をもう片方の手で包み込みながら女狐との距離を置いた。が、ぼすん、と誰かにぶつかつた。彼女は慌てて振り返ろうとしたが、遅く、彼女は背後から右手と左手を掴み取られて自由を奪われた。女が『やられた』と思ったそのすぐ後には、背後から彼女を捕まえ、た者が女狐に向けて野太い声を放つ。

「YES、姉さん！　こういう若い女を略奪するなんていう趣味はひどくえげつねえから人間の屑ですが、俺は、そんな姉さんがスーパー大好きですぜ」

なにをめちゃくちゃな言葉で喋るとるんじゃこの野太い腕をしている野郎は、と心底むかついた女は背後の男の顔を拝みたくなかったが、しかし、突如、逃れることの出来ない睡魔に襲われてしまい、数分後には、かくり。首をうな垂れて、気絶するようにして、眠ってしまった。背後にいた野太い男が拘束していた女の両腕を離すと、

女は土埃のたつ地面に糸の切れた人形となってふにやふにや倒れた。

その様子をじつと凝視していた女狐は、うつとりした。

「ああん！ 倒れ方が可愛らしかったのねえ！ これも略奪しちゃうのはもつたないわあ。でも私は中途半端とか妥協とか嫌いだから、ううん、今も奪い取らなくちゃ性分が納得しないのよ。これはもう彼女が哀れだとしか言い様が無いわ！ だけどそれも略奪しちゃいたい…。私が彼女に持つ哀れみの感情さえも自分で略奪して後には何が残るのかしら！」

ふふふふふふとなりはじめるかもしれない

私は受け入れる。

これからどんな目に遭うかなんてわざわざ想像したりなんかしない。

生きるって常に刹那刹那瞬間瞬間を楽しむってことだから。だから辛いことなんて私はわざわざ想像したりなんかしない。してやらない。ああ、でも私が今死んじゃったら、誰がトロを救うんだろう。私は生きたい。彼の命と私の命は共同されてるのに、私が死んだら、『あなたは前を見ているようだけど後ろを見ている風にも見えるね。どちらを見ているのかわからない。まあ、それは誰でも同じだとは思うんだが。誰にでも表と裏があるっていう感じだからね。だが、君の場合はそれが顕著に垣間見える気がするよ。まあ大概はひたむきなほどに真っ直ぐに見えるんだがね。おそらくそのひたむきさが時に、あなたの見えない部分を強調するのもかもしれない。極端、ということだね。そういう意味では、トロと君は似ている。不思議なこと』

素敵なおじいさんだったと思う。言っていることは時たま意味不明だったけど、時々、あつ、って思わせてくれる言葉を私とトロにたくさん伝えてくれた人だ。きつと心の込められている言葉だったから、今でもおじいさんの言葉は覚えていられるのかもしれない。尽きるはずだった命を与えてくれた、恩人でもある人の言葉を忘れちゃ駄目なのは、当然だろうけど。

だけどトロと私が似てるってのはよくわからないなあ。いや、わかる気もするけど、似てるってわけじゃないと思うんだよね。私とトロは真逆だけど似通ってる部分がある。確かに少しはある。だけど結局それって性格が真逆だから少し似てる部分があるだけでそれが目立つちゃうってだけのことじゃないのかなあ。あのおじいさんは素敵だったし頭も良さそうな雰囲気を出してたけど、そのところは勘

違っていたような気がするな。今にして思えば、というやつ。

てか、そんなことを考えてる場合じゃないんだよね、今は。

「ああん！ もう、耐えられないわ私は！ こんな素晴らしいドブ猫を目の前にしているのになんで手を出すことも胸を出すことも自分で制限しなくちゃいけないのかしら！ 理解が自分で出来ない行為！ 自分で自分の感情を行動を略奪するのがこんなにも辛いことだなんて、今までたくさんやってきたことだけこのドブ猫ちゃんを前にしてこんな縛りはきつついわあ！ もう仕方が無いわバリ坊、こっちに來なさい。もう私の縛りを解きなさい。そしてあの娘を解放しなさい！ 今からあのドブ猫と私で鬼ごっこよ！ 私の略奪とあの娘の希望をかけて鬼ごっこよ！ まじ鬼畜！ こんな私って、なんて気持ち悪くて最高なのかしら！ ほら、バリ坊、はやくしなさい。何やってるの、自慰してるの？ まさかね…。あなたのアレは私によって昔略奪されたはずよね。あなたが私と比べて下位となった証として、今もホルマリン漬けにでもしてあるはずよ。え、なんであなた自慰できるのおかしくないそれ？ おかしいわねえ、真実はいつも一つじゃないのかしら。あなたは私にアレを取られなかったパターンの世界からやってきたバリ坊なのかしら。SFじゃあるまいしあり得ないーって感じよそんなの。ほら、バリ坊、なんとかいったらどうなの。無言でそんな息を荒くするだなんてまじで最悪に気持ち悪いから私でもドン引きして気持ちが萎えてきたわ。ハッキリ言っただけのあなた、最低よ。哀れなふんふん が道端で大の字に寝そべるかのごとく」

あんだけ華やかで眩しかった、占い師風の人がこんなにも頭がおかしいだなんて想像もしてなかった。さすが略奪都市ブランドリア住んでる人間はみな頭のネジが三十本ほどは弾け飛んでると見て間違いないね。これを受け入れるのはさすがの私でも難しいわ。

ていうかバリ坊だなんて、見た目はごっつい癖に可愛い名前だけど、気持ち悪いなあ仕草が。なんであんな体勢であんなことをしているんだろ…。さすがに、目を伏せたい。

「だけど受け入れるんだ、私は。自分が甲冑者になれないってことも簡単に受け入れた私が、こんな、気持ち悪いだけの風景を受け入れることが出来ないわけがない。」

「ありがとうバリ坊。さあ、もう私は自由よ！ ドブ猫のあなたもほら、早く逃げなさい！ ポロ布雑巾つぐつちやつりに陥れて膨張しちやいたい私があなたに汚濁を貸与するのよ。だから後で返してね、私に絶望を！ 略奪の連鎖が私に絶望を再確認させて汚濁がよりに汚濁、ぐずぐずのポロ雑巾よりも汚らわしいふんふん が全てをめちゃくちゃにしてくれるすなわち崩壊よ。何が崩壊しているかはもう理解済みよね。性格よ。人間としての性格よ。性格よ。性格よ。それがふんふん となっているから略奪はやめられないの！ さあ、バリ坊、あなたはそこで記憶にとどめなさい。私と彼女の鬼ごっこがいかに希望的観測を打ち破り世を絶望に満ち溢れさせるのか。そのああなたの記憶が唯一の記録となつて、私と彼女に刺激を貸与する証……。泉が、源泉が、それ。モチベーションが上がってきたわあああああああああああああああああああああああ」

「やっぱり、受け入れられるわけがない。
ていうか私の拘束、外れてないのに、逃げられるわけないじゃん。
受け入れられるわけがない。」

沈鬱には沈鬱じゃあいかんぜよってどういうことだよ

都市トリフィスにてト口が失っていた意識を回復させて、現世に意識を帰還させて、ふわっとした態度で被っていた薄布を放り投げてブルーシート内を見渡した時に、医者らしき白髭を蓄えた汚らしい感じの闇医者つばい雰囲気がなんとも言えず憎たらしいと感じた。

だが闇医者つばいそいつがブルーシート内でエキサイティングな「俺がやってやったんだ」とみたいなドヤ顔を否定するなんて不可不可って感じだったのはト口が理解しなければいけなかつたのは彼が目の前のドヤ顔に命を救済されたのだとしたら、ドヤ顔を無闇に否定することは己の評価をさげることには値する可能性が高かつたからだ。萎れた薬草を握りこんでいるその闇医者の萎れた手に薬草のエキスが染み込んでるのが視界に入るが、どう見てもエキスは臭そうだったから、自分の体もそれで治してもらったのだとしたら、めっちゃ臭いのをブルーシート内に蔓延させているのが俺の体なんだな、と悟ったト口はいかんせん自分の体が周囲に迷惑を与えているという事実を突きつけられているのがナイフを喉元に突きつけられているのと同じくらいに直接的な不快だったから、気分が落ち込んで、何か心を癒してくれるものはこのブルーシート内に転がっていないものかそれで癒されたい、と思ったけれどもブルーシート内には陰気なものばかりが立ち並んでいて、つまり医療器具はひどく陰気な印象をト口に与えるには十分だったのだが、癒し系も少しはあって欲しいものだった。だがいわゆる白衣の天使てきな、つまり俗に言うナースと呼ばれる方々がブルーシート内にいるわけではなかった。正直言って、癒し系はブルーシート内で皆無だった。いなかった。だから彼は自分の落ち込んでいる気持ちに処理をつけることが出来ずに、自分の臭いにいたたまれなくなり、ブルーシー

ト内から慌てて飛び出ていったのだ。

「医者の人、ありがとう」

という礼だけを小さく述べると、相手は「応」とやけに渋みあるかっこいいボイスだったが、そんなことはトロにとっては何細なる出来事でしかなく、陰気な気分をどうにかポジティブにもっていないと自分の肉体が薬草エキスによって臭いを撒き散らしているという現状に耐え切れそうもなかった。だから彼は「応」といういささか格好の付けられたそれに対する思考を内面で行うこともなく、ブルーシート内を後にして、何時の間にか夜になっている、都市トリフィスの、人気のないあたりを散策しはじめたのだ。といっても目的の場所はすぐ近くで、というかほとんど目の前で、そこには海があったりして、とても癒し系な海の暖かみという奴にトロは浸ってしまえばトロの気持ちは心はアットイウマに臭いの呪縛から解かれて、気分がポジに持っていたかもしれないが、それが、それが不可だったのにはもちのもちのもちもち理由があつて、つまり、レミレが海のなんつうかテトラポットみたいところで突っ立っていたのだけれど、彼女の様子がひどく沈鬱なのが後姿からでもわかるほどに明確だったから、トロは、海の母性に癒されることもなく、彼自身も沈鬱な気持ちのまま、レミレに話しかけることとなつたのだ。

「薬草、レミレが」

トロの極小なる陰気な声に振り向いたレミレは、ひどく落ち込んでいるのが一目で明らかだった。普段の元気さがそこには溢れていなかった。

「そうだよ。私がいってきた。元気になったね、トロが」

「たすかった」

「心臓が繋がってるんだから」

「うん」

「助けなきゃ私も死んでしまうし」

なんとも不吉な臭いがレミレにまとわりついていることがトロに

もわかった。

だがそれをどうにかできるとは、彼、思えなかったのは、彼自身もまた、沈鬱だったからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4626o/>

くろいかっちゅうそのたもろもろが全ておかしいってなくらいにくらいにゲシ

2010年11月14日18時55分発行